

(3) 読書と映画



府立一中では、ひとりの先生ともひとりの友だちとも、親しく交われなかったが、加藤の中学校時代がまったくの「空白」であったわけではない。その「空白」を埋めるように、加藤が関心を示し、癒されたものが三つあった。加藤が関心を示したのは、ひとつは読書であり、ひとつが映画であり、もうひとつは夕陽である。

読書については、ふたつが加藤の心を射た。ひとつは詩歌集である。両親ともに詩歌を好んだこともあり、加藤が小学生で『万葉集』を開いてみたことはすでにいった。中学生時代には、与謝野晶子『みだれ髪』（写真：『みだれ髪』初版表紙）や正岡子規『竹之里歌』を読んだ。「牧水にも夢中になった」。さらに『万葉集』の歌のいくつかを覚えた。その後も加藤にとって『万葉集』は大きな意味をもち「詩とは何かを考えるときに、藤村・晚翠を考えず、またいかなる外国の詩人のことも考えず、まず何よりも「万葉」の歌人たちを思いうかべる」とまで書いた。



もうひとつは芥川龍之介である。「馬鹿ねえ」が口癖のおしゃまな幼友だちだった山田千穂子が「馬鹿ねえ、芥川龍之介を知らないの？」とって貸してくれた一冊を読んで、たちまち芥川に魅了された。小遣いをためて渋谷の古本屋で全集10巻を購入して（その全集は立命館大学「加藤周一文庫」に所蔵されるが、第7巻は欠本、上写真）、全巻を読破した。なかでも加藤が感銘を受けたのは『侏儒の言葉』だった。『侏

『儒の言葉』について、加藤は次のように述べる。

学校でも、家庭でも、世間でも、それまで神聖とされていた価値のすべてが、眼のまえで、芥川の一撃のもとに忽ち崩れおちた。それまでの英雄はただの人間に変わり、愛国心は利己主義に、絶対服従は無責任に、美德は臆病か無知に変わった。私は同じ社会現象に、新聞や中学校や世間の全体がほどこしていた解釈とは、全く反対の解釈をほどこすことができるという可能性に、眼をみはり、よろこびのあまりほとんど手の舞い足の踏むところを知らなかった。(『羊の歌』「反抗の兆」)

加藤が生涯続けた社会的政治的な批評は、『侏儒の言葉』によって促されたに違いない。また加藤は次のようにも総括する。

芥川龍之介のなかに、私が読みとったのは、反軍国主義・日本歴史の偶像破壊・道徳談義への反抗・大勢に順応しない批判的精神であったようだ。吉野作造を通じてではなく、芥川龍之介を通じて、いわゆる「大正デモクラシー」の遺産を受けとったともいえるだろう。(「読書の思い出」)

もうひとつの埋め合わせの映画は、中学時代、両親はひとりで映画館に行くことを禁じていたので、必ずしも回数が多かったとはいえないが、それでもいくつかの映画を見ている。

その頃、東和商事会社の輸入していた活動写真のなかでは、七月一四日の晩に、貧しい恋人たちが出会ったり、別れたりしていた。またロシアの大公が、国際会議の古都で、夜遅く町娘を馬車に乗せて走りまわるかと思えば、中部ヨーロッパの麦畑のなかでは、まだ有名にならない大作曲家が、美しい娘と戯れていた。霧の深い英国の都では、警察の眼を

自由自在にぐらます神出鬼没の怪盗が、売春婦に裏切られ、貧しい者が互に援けあわな
くでは世も未だと呟きながら、召捕られてゆく。(『羊の歌』「反抗の兆」)

この文章から加藤が見たといえる映画は『会議は踊る』(監督エリック・シャレル、1931)、『未
完成交響楽』(監督ヴィリ・フォルスト、1933)、『三文オペラ』(監督G・P・パプスト、1931) な
どであろう。